

ニセコ（札幌）カンファレンスについて

中村記念病院 脳神経外科 中川原譲二

第7回ニセコ（札幌）カンファレンスの総括

昨年8月27日（土曜日）第7回ニセコ（札幌）カンファレンスは、約80名の参加者を得て開催された。講師として道外から4人のエキスパートを招き、神経腫瘍学、脳血管障害、エミッションCT、大脳皮質機能に関する最新の研究について各々に熱のこもった講演をしていただくことができた。神経腫瘍学の分野では、都立駒込病院脳神経外科の長島正先生から“脳腫瘍の増殖能と浸潤能”という演題で脳腫瘍の成長に関する基礎的および臨床的研究の現状についてわかりやすく講演していただいた。脳血管障害の分野では、東京大学医学部脳神経外科の佐々木富男先生から“クモ膜下出血後の脳血管攣縮”という演題で脳血管攣縮の病因、診断、治療について体系的な話をうかがうことができた。また、脳血管攣縮の病因の中で“endothelium”という新しく発見された peptide の関与が、今後大きな研究課題となることが述べられた。エミッションCTに関しては、京都大学医学部核医学科の米倉義晴先生から“SPECTによる脳機能測定”という演題で、SPECTの現状と役割についての講演があり、これまでPETによってしか測定できなかった代謝や、神経伝達物質に関する情報が、SPECTによって画像化される日が近いという印象を多くの参加者に与えた。大脳皮質機能の分野では、東北大学医学部病態生体情報学講座の丹治順先生から、“随意運動発現における大脳皮質諸領野の関与”と題して、動物実験から得られたデータを根拠とする貴重な講演を拝聴することができた。この講演に対しては数多くの脳外科医が“勇気づけられた”との感想を後に述べていた。

以上、昨年のカンファレンスの内容について簡単に振り返ってみたが、各演題ともそれぞれに論点が明快であり、さらに質の良い討論によって、参加者

は講演内容をよく理解することができたと思われる。また、カンファレンス終了後は例年の如く、Beer partyを行ない、その後いままでもなくスキノに繰り出し、それぞれ親交を暖めることができた。そして講師の先生方にも、去り行く北海道の夏を満喫していただけたものと思う。

ニセコ（札幌）カンファレンスの歴史

ニセコ（札幌）カンファレンスは、脳神経系の各領域において指導的また先駆的な業績を上げている諸先生を講師として当院にお招きし、当院および近隣の若いドクターのための生涯教育と相互の交流を目的として、1982年7月に第1回目が開催された。当初は、当院の医局がカンファレンスを主催し、菊池晴彦先生（当時、国立循環器病センター部長）、都留美都雄先生（当時、北海道大学脳神経外科教授）、中村順一先生（中村記念病院院長）に顧問をお願いした。第1回目の会には約70名の参加者があり、各講師の熱心な講演と討論によって、大いに盛り上がり、年次開催へのはずみとなった。会の名称に冠した“ニセコ”の由来は、当初このようなセミナーを当院の福利厚生施設（収容人員50名）がある“ニセコ”の雄大な自然の中で泊まりがけで行なおうと計画したことにあつた。しかしながら日常多忙な先生方に一人でも多く参加していただくことがより有益であろうと考え、第1回目から札幌市内の当院にてカンファレンスを開催してきた。1983年、第2回のカンファレンスの折にはニセコの地で、懇親会を行なったが、バスによる2時間の移動の間に大方の参加者の血中アルコール濃度がかなり上昇してしまうという、ちょっとしたハプニングがあつた。

このカンファレンスの準備と運営には、主に前年の専門医試験に合格した若いドクターが関わってきた。当初は不慣れなために通信業務や運営上、様々な困難があつたが、1988年には第7回目を数えるこ

とになり、今や医局の定例行事として定着している。

しかし、非常に残念ながらこれまでは講演していただいた貴重な内容を文章として残す形式をとらなかったため、講演内容の理解を深めたり、参加できなかった先生方に内容を紹介することがほとんどできなかった。なんとかできないものかと苦慮していたところ、幸いにも1986年12月に財団法人北海道脳神経疾患研究所が設立され、同研究所が1987年第6回以後のカンファレンスを主催することになり、また1988年、第7回以後の講演内容を同研究所発行の医誌に掲載することになった。このことにより、多くの先生方にカンファレンスの内容を知っていただく機会ができた。講師の先生には、講演後にも大変なご苦労をおかけすることとなったが、講演内容を文章として残すことにより、当カンファレンスのレゾナートルをあらためて確立することができると確信している。

近頃は、各地で様々な講演会やスポーツを組合せたカンファレンスなどがそれぞれ大いに盛り上がりを見せているが、私たちのニセコ（札幌）カンファレンスも今年第8回を迎え、当初からの主旨を大切に、より充実したものとして発展させたいと考えている。今回その内容の一部を本誌上において、全国の先生方にご紹介できることをたいへん誇りに思う次第である。

最後に1982年第1回から1988年第7回までの講演を、講師の諸先生に敬意をはらいつつ、以下に紹介する。

第1回（1982年7月31日）

- ・脳梗塞の病態と血行再建術
慶応義塾大学医学部 脳神経外科
河瀬 斌 先生
- ・脳虚血、基礎と臨床
北海道大学医学部 脳神経外科
中川 翼 先生
- ・MoyaMoya病の脳循環と最近の知見
Spinal AG
国立循環器病センター 脳神経外科
唐澤 淳 先生

第2回（1983年7月30日）

- ・2次元脳電図の脳虚血への応用
北海道大学医学部 脳神経外科

中川 翼 先生

- ・バルーンカテーテルテクニックの臨床応用
中村記念病院 脳神経外科
宇佐美 卓 先生
- ・脳外科領域におけるdigital subtraction
Angiographyの利用法
慶応義塾大学医学部 脳神経外科
河瀬 斌 先生
- ・アラキドン酸カスケードと虚血性脳障害
東京大学医学部 脳神経外科
浅野 孝雄 先生
- ・脳動脈瘤手術のpitfalls
秋田県立脳血管研究所 脳神経外科
安井 信之 先生
- ・脳動脈瘤の外科的治療について
名古屋保健衛生大学 脳神経外科
佐野 公俊 先生
- ・脳循環の最新知見
国立循環器病センター 脳神経外科
唐澤 淳 先生

第3回（1984年8月11日）

- ・脳血管障害とポジトロンCT
秋田県立脳血管研究所 放射線科
上村 和夫 先生
- ・脳循環
福山太田病院 脳神経外科
松本 皓 先生
- ・脳腫瘍の治療
都立駒込病院 脳神経外科
松谷 雅生 先生
- ・脳腫瘍の治療
日本赤十字社医療センター 脳神経外科
設楽 信行 先生

第4回（1985年8月31日）

- ・神経学におけるNMRの現状
千葉大学医学部 神経内科
小島 重幸 先生
- ・側頭葉てんかんへの新しいアプローチ
東京警察病院 脳神経外科
真柳 佳昭 先生
- ・脳動脈瘤に対するアプローチの際の血管解剖について
信州大学医学部 脳神経外科
小林 茂昭 先生

第5回 (1986年8月30日)

- ・椎骨動脈瘤の手術 (より安全な手術のために)
千葉大学医学部 脳神経外科
山浦 晶 先生
- ・1) 後頭蓋窩血行再建術について
2) モヤモヤ病のomentum transplantation
大阪脳神経外科病院
唐澤 淳 先生
- ・脳血管障害と視路・眼運動系の症候学
東北大学医学部 脳神経疾患研究施設
脳微細構造部門
山本 悌司 先生
- ・脳腫瘍の温熱療法
新潟大学医学部 脳神経外科
田中 隆一 先生

第6回 (1987年8月29日)

- ・神経系蛋白に対するモノクローナル抗体の作成
群馬大学医学部 第一病理
中里 洋一 先生
- ・Interventional neuroradiology
- 最近の進歩 -
福岡大学医学部 放射線医学
後藤 勝彌 先生
- ・Positron CTの神経心理学領域への応用
秋田県立脳血管研究センター
神経内科学研究部
田川 皓一 先生
- ・Chiari 奇形とその合併疾患の診断、治療
順天堂大学医学部 脳神経外科
佐藤 潔 先生

第7回 (1988年8月27日)

- ・脳腫瘍の増殖能と浸潤能
都立駒込病院 脳神経外科
長島 正 先生
- ・クモ膜下出血後の脳血管攣縮
東京大学医学部 脳神経外科
佐々木富男 先生
- ・SPECT による脳機能測定
京都大学医学部 放射線核医学科
米倉 義晴 先生
- ・随意運動発現における大脳皮質諸領野の関与
東北大学医学部 病態生体情報学講座
丹治 順 先生